特42
986

人情錄 茑屋吉八大岡政談

上卷

煙草屋喜八大岡政談叙

煙草屋喜八が傳記ハ夙ゝ人口ゝ膾炙ゝ三尺の童子も能く
少及ひたれが事己ゝ舊りたるものから九忠孝の事たる幾
度之を聞も倦事なく數度之を讀むも飽くことなきハ人情の常
これが即編者の所注目處ゝゝ煙草ハ烟草屋の煙草の烟ゝ卷込んと切
々と吹をハ國府ゝあらで粉名ゝ九分ある店晒ゝお高い物でハなさろう
が編者も其身を粉ゝゝた事と婦幼達大眼ゝみ免ゝあらば僕迄の悦
何物ゝ之ゝ若ゝん　申六月

煙草屋喜八大岡政談叙

忠僕畑草屋喜八が傳記ハ夙小人口ヲ膾炙し三尺の童子も能
之を載ヲ及びたれが事己ヲ舊りたるものから凡忠孝の事たる幾
度之を聞も倦事あく數度之を讀むも飽ことあきハ人情の常
これが即編者の所注目廻らぬ筆ハ烟草屋の煙草の烟ヲ巻込んと切
々と吹ぬ、國府ヲあらで粉名が九分ある店晒しお高い物でハござろう
が編者も其身を粉まゝた事と婦幼達大眼ヲみ免しあらば僕迄の悦
何物ヲ之ヲ若かん

申六月

煙草屋喜八大岡政談上巻

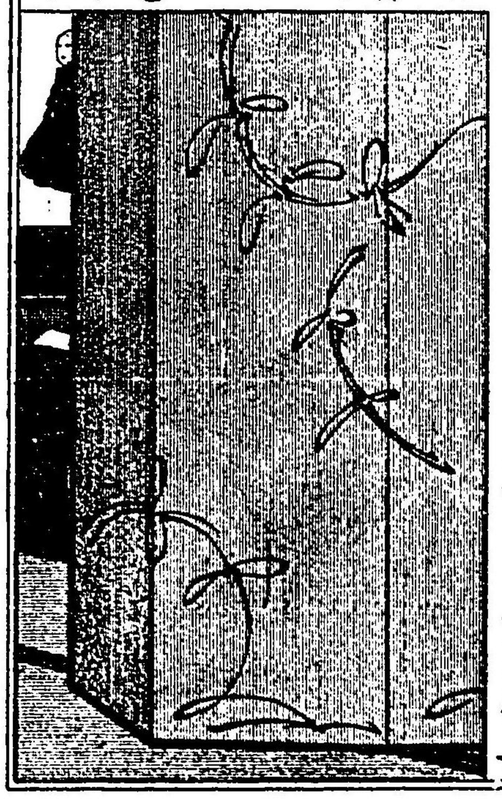
半開子無聊編次

第一回

不題享保年間下總國古河の城下ふ穀物屋吉右衛門と云者あり土地ふ雙あき豪家ふて江戸ふも出店十三軒あり何れも地面土蔵付あり出店親類又ハ番頭手代若い者に至る迄大勢召使ひ最と豊ふ世を送りけるが一人の倅吉之助ハ今年十九歳人品能生れふて父母の寵愛大方ならぐ諸藝をも一通り習ハせれど田舍の事ふれバ遊藝の師匠ふ乏しく江戸へ出して修行させんと両國横山町三丁目の角店にて間口十八間ある穀物乾物類を商ふ番頭傳兵衛が預り店へ遣し師を選み金

銀を惜まぐ學バせけるが爰に活花の相弟子ふて六之助と云ハ同所廣小路の虎屋の息ふるが至て如才ふき性質の男にて平常吉之助と忍交り厚かりしが或日六之助が誘引ふて納涼ふ出たる帰りがけ船中より直ふ吉原の燈籠を見物せんと勧めけれど吉之助ハ万事不案内殊ふ當地へ參りてい未だ日も淺き ふ遊所場へ立入ハ番頭の手前も如何と堅く推辞其日ハ宿へ帰り傳兵衛ふ此事を語りけれバ傳兵衛首を傾け六之助殿ハ身代も餘程違ひたる事故御断切ふもあるまじ此後箇様の事がありたらバ御同伴の上斯様々々ふ成され随分奇麗ふ金を御遣ひ成され見苦からぬやう成し給へと教へ置きけれバ其後花火見物の崩れふ六之助同道ふて吉原へ行き蓬莱屋といふ茶屋へ上りけるに吉之

助い豫て傳兵衛ふ教へられたるい爰ふりと茶屋の女房をはじめ娘若い者召使の女どもまで七八人へ立派ふ纏頭を遣り江戸町一丁目の玉屋へ送くられ初瀬留といふ娼妓を相方とし遊びしゞ吉之助い男振も好下總の大盡と聞き初瀬留も真實を盡して待遇けれバ吉之助い魂魄も天外ふ飛只現の如く浮れたるが是より雨の夜雪の日も厭ハゞ通ひ詰しゝハバ初瀬留も固より憎からぬ男の事遂ふい互ふ深くふり一日逢ねバ千秋の思を為し離れ難ふき風情とふれバ傳兵衛も深く心配ど度々意見をしたれど用ゆる景色ふし翌年迄ふ貳千七八百兩の遣捨ふるにて今い捨置難しと此由古賀へ申遣たる故父吉右衛門い以ての外立腹し態々出府ふし吉之助を呼で勘當を云渡し古布子を著せ小使



錢三百文持せ追ひ出けるゞ番頭婢若者も種々詫言をれど吉右衛門承知せゞ其ゞ古河へ帰りけれバ今い憑の綱も切果たる吉之助い泣々横山町を立出其夜兩國橋ふら身を投んと覺悟し夜の更るを待ち交加の途絶たる頃欄干へ足を懸南無の一聲と共ふ身を跳らを所をヤレ待れよと小提燈を持つたる男ゞ後ろより抱き留るを否々放して否放さぬと揉み合ふ中ふ面を見れバ幇間の五八ふれバ吉之助い尚更身を慙ぢ逃げんとをるを五八い確と掣き止め這い若旦那何故の此始末私倩い多く御恩を受たる身如何樣ふも仕方あるべしと強ふ手を取我家へ伴ひ一伍一什を委曲聞初瀬留方へ知らせ遣りける故打驚き取る物も取り敢ず五八ゞ宅へ駈け来れり

第二回

却説も初瀬留ハ吉之助ガ姿を見涙ふぐらふい〳〵るやう御勘當の身と成られ〳〵も元をゝへバ妾から嘸か〳〵憎くも思さんが此上ハ何樣ヲ〳〵ても見継申さん程ヲ暫く當家ヲ居給へといひけれバ五八も共ヲ詞を尽ト〳〵て慰めけるゆゑ心あらぎも其世話を受居たるこそ果敢ふけれ徒て或日五八ハ吉之助を伴ひ觀音〳〵参詣せ〳〵ヲ後から若旦那と呼者あり吉之助ハ誰ぞるかと振返り見れバ古河ヲて召使〳〵喜八と云者ありけれバ吉之助ハ遊藝稽古の爲とて出府せ〳〵事を始有し事ども詞短ヲ咄〳〵今ハ不自由ふけれど何卒勘當の詫をせんと觀音〳〵参詣せ〳〵ありと述るヲ喜八の驚一方ふらぶ何ハ兎もあれ五八殿の深切礼い詞ヲ

盡〳〵難〳〵と厚く礼を云ひ是より五八方へ赴き初瀬留ヲも面會〳〵是ヲも又礼を述べ偖云ふやう二千や三千の金ヲて勘當ふざるとい餘り旦那も情ふ仕方去り乍當分の見懲ふるべきま〳〵私儕が参て御詫〳〵ませう夫ヲ就ても吉原ヲ御出ふされて聞えが宜〳〵有ましまいから私儕方でしゝバ喜八い吉之助を伴ひ我家を指〳〵て帰りける开も此喜八と云ふハ以前古河ヲて吉右衛門ま使いれ十年の年季を首尾能勤め上げ資本を貰ふて江戸へ出るが薄命ヲも三度類焼〳〵是非ふ〳〵今ハ麻布原町ヲ刻煙草を渡世とふ〳〵幽に其日を送りけれど生得亟直律義ふる男故人の合力ふど受バ又妻のお梅も容貌を十人並ヲ勝れ其上貞實ふる婦人ふれバ吉之助を連れ帰りたる日より最と大切ヲ

待遇たるハ類稀成若者共ふり然きど貧の病ふ困められ吉之助へ着たる布團さへ心の侭ふらねハ夫婦談合ーお梅ハ一年の間水仕奉公ふ出て其給金を前借ーて夜具を調へ主人を暖ふ臥ませんと夫より奉公口を捜索せーー慶幸麻布我善坊谷ふ火附盗賊改組與力笠原条之進方ふて中働を雇ふと聞申込ーー慶早速調ひ住込ける去程ふ喜八ハお梅の給金の中二両借りたれど壹両二分ハ支度ふ遣ひたれバ残の貳分ふて豫て質入を為て置た布團を請出々るゞ此質屋ハ身代能今下質の金八十両請取て亭主ゞ帳場硯の抽斗へ入たるを喜八ハ熟々と見て有る所ふ々有る者哉我ハ二分の金ふ差支へ妻を奉公ふ出を仕義備々貧福ハ是非ふき事也と腹の中で考へーゞが若那の金があれバ主人ふ不自由も為せまじ又女房を奉公ふ出をふも及ぶ

まじ何も主人の為寧を今夜那金を盗取んと不図胸ふ浮ーゞが災難の基と い成れり夫より喜八を我家へ戻り夜ふ入て吉之助を寝させ窃ふ出刀庖丁を研澄ー夜更ー頃密と我家を立出頭冠ふ顔を隠ー軈て質屋の邊ふ行四隣を窺ふ幸土蔵の普請にて足場が掛て有けれバ恐々攀上り戦栗る足を履志めー勝手許の家根へ到りー慶思ひよらぬ引窓より大の男が拔ーつと出たるふ發と思ひて屋根の上へ平倒れバ彼男ハ之を見て汝ハ何者ぞ我今夜當家ふ忍入思ひの侭ふ窃まんと仕たる家根ふ足音ゞ成る故不思儀ふ思ひ出来れり汝ハ何ーふ来たと外めるふぞ喜八ハ身の上を語り全ー出来心ふて盗賊ふ忍び入らんと来りー由を話ーけり

第三回

當下彼の男い云へるやう汝が見たる八十両い此ふるべーと財布の侭見世迚も汝が手並ふて
ハ此金を盗まん事思ひも寄らぢ我今汝が忠義の心ふ愛ーと之を汝ふ與ふる間思ふやう
せよと彼金を呉ける故喜八ハ押戴き世の中廣ーと雖ど御身ゞ如き盗賊い稀ふるべー命
を的ふ此家へ忍び作ら惜げもふく我ふ此金下さるとハト涙を流ー願ふハ御身ふお名前
を知らせ給へんことを請けるふぞ彼男い点頭て我い田子の伊平と云ふ大盗賊ふり是迄
火附夜盗の數何程ふるふを知らね共人を殺ーたる事いふー明日ふも召捕るー事あらば
亡跡を弔ひ呉よと云ふゞら又々引窓の中
へ這入けれゞ喜八ハ後影を伏拜作ら徐々
と元の足場を下らんと為る折ーも伊平が
附火を為ーものと覺ーー質屋から燃上る
と等ーー烈ーき風ふ忽地四方へ廣がりー
かゞ驚破火事よと近所近邊の大騒動喜

八ハ狼狽躑躅て歩行まれぢ殊ふ大金ハ所
持する出刃庖丁ハ有り見咎られてハ一大事
と烟の下を辛ーー馳出たる向ふへ火附盗賊改
與田主膳殿組與力同心を従へて此方を指ー
て来られけゞ喜八ハ疾持足の心咎め横ず
切らんとする所を與田が組下山田軍平が喜
八の体を胡乱と見留め癖者待と聲懸てー袖を確りと取り召捕んとする形状ふ喜八ハ
一生懸命と出刃庖丁ふて軍平ゞ持たる袂を切り捨て早くも人込の中へ紛ゞ後をも
見ぢーて逃去りたるゞ軍平い有ー様子を與田殿ふ申立後の証據と辨慶縞の單物ゞ古女
を茶ふ染返ーたる布子の袂ハ其侭取置れけり恁とも知らぬ喜八ハ危くも袖を切てその
場を遁れ我家へ帰り胸撫下ーたる頃い火も稍鎮り世間も静ふふりたれゞ吉之助へ
ハ程好ーー云て彼八十金ハ戸棚の隅の重箱へ入れ臥房ふ入んとする時表の戸を烈ー

く敲く者あり偖ハ役人が跡を追随来りしかと心も落付ず返事も碌ふ出来ざれバ表ふてい又々敲きて早く此廉明てと云ふハ亡く婦人の聲合点ハ往ねど何用で来られ〜やと少〜戸を明て表を見れバ妾ハ吉原から参り〜が吉之助様ふお目ふ懸りたくと云聲ハ初瀬留ふれバ吉之助ハ奥より走り出如何〜て夜中遥々と此處まで来り〜り先々此方へと上げ〜れバ初瀬留ハ餘のお懐〜さふ今宵亡八を逃亡〜て参りまたと云ふ喜八ハ固より吉之助も驚きたれど詮方あけれバ何れ明日の事と彼是〜て居る中程ふ〜夜も明たれば喜八ハ釜許を焚付んと為て居るところへ煙草を呉との聲ゞ在るふハイと返辞を〜て何の心も付ず表の戸を明け煙草を出せバ一人の侍が喜八の衣服ふ目を注たるゞ何食ぬ顔色ふて徐々と向ふへ

往きたりける是ゞ昨夜喜八を捕んとせ〜山田軍平ふて今朝湯の帰り掛け煙草を買んと喜八ゞ店へ立寄たるに証據ふ取り〜片袖と紛ふ方ふき喜八ゞ姿又手ハ昨夜の盗賊ハと心ふ納め其足ふて笠原条之進方へ赴き喜八の事を物語り早々召捕り給へと申〜ける条之進ハ然らバ取逃さぬやう足下も仕度慫へられよと手配ふゞ掛りけるゞ喜八ゞ運の末といふハ如何ふ周章たりけん昨夜の布子を著替もせず其侭ふて仕事ふ掛り居たるところへ家主平兵衛を先ふ立召捕の役人込み入たり

第四回

扨も此家主平兵衛ハ仲間の中でも評判好き男ふて随分用ふも立至つて慈悲

深く客氣有る者あれば喜八が平生の行ふ感心して有けるが町内の自身番へ火附盗賊方の與力笠原条之進来り其方店子煙草屋喜八ふ御用筋あれば案内せよといひ付り喜八ふ何の犯せる事あるら彼ハ平常心懸宜き者ふるがと思ひたれど役筋あれば是非ふくて案内せ〜ふ忽ち御用の聲と共ふ喜八を召捕られけきば呆れて詞も出ざり〜が条之進い懐より袂の切れを取出て喜八が衣たる布子へ合せて見るまつくりと合ける而已ら家内を點検るふ八十両の金も出たるふぞいよ〜盗賊火附い喜八ふ相違ふ〜と極り添状を以て直ふ町奉行大岡殿へ引渡〜吉之助初瀬貿家主へ預とふり〜ふ平兵衛を以の外驚き喜八ふ於て斯る所為あると偖々人い見掛ふ依らぬ者併〜之ふを仔細あらんと自身番ふて喜八を片隅へ

招き何様云了簡で此様ふ事を仕出来たと聞ふ喜八い主の為妻を奉公ふ出せ〜事から質屋で金を見て不図慾くふりし事盗賊伊兵衛ふ貰ひたる事まで落ふく物語りければ平兵衛い憫然ふ思ひ如何ふも〜て御慈悲を願ひ見んと慰め夫より家ふ帰り吉之助初瀬留の両人ふ對ひ喜八が語り〜事を具ふ述べ最早近々御仕置ふふるべ〜是非もふき事ふりと云ふふ両人い驚きて偖い左様〜た譯ふるら然て見れば我手で殺ても同じ事縱令此上勘當を免さるとも喜八を殺〜て何言譯あらんと已ふ首を縊るべき体ふれば平兵衛い驚きて今二人とも此處ふて死ふれて〜吾倘一人の難義ふり夫よりい喜八を救くる手段を廻らそが肝腎ふるが就て〜古河へ赴て御身が親御ふ面會〜種々御相談を仕度思へい吾倘急ふ古河迄行

ん必ぞ〳〵短見た事を為たまふあと意見を加へ女房ふも能々留守の事を云付け近所の者ふも頼み平兵衛ハ其翌日下總古河を指〳〵て出立〳〵ける偖も平兵衛ハ駕を急ぐせける程ふ其日古河へ著せ〳〵ふが穀物屋吉右衛門と尋ねるに名ゑ聞えたる豪商ふれば忽地ふ分りければ其家へ到り見るに聞〳〵ふ勝る構造まてあり〳〵江戸ふも多く無き暮あれば心ふ喜び偖店先ふて駕より下り某ハ江戸麻布原町家主平兵衛と申者ふるゞ御子息吉之助殿の義ふて密々ふ御相談いたし度義ありて態々参りたれば是非御主人ふ御面會申度と云入〳〵ふ吉右衛門ハ何事ふやと店へ来り兎も角も此方へお通りあれと奥の間へ請ゞ茶煙草盆等最と叮嚀ふ待遇〳〵悴の事と聞て夫婦ともふ其處へ出初對面の口誼終り

ければ平兵衛ハ少〳〵膝を進ませ偖此度参上致せ〳〵仔細ハ斯様々々云々の事ふと吉之助が勘氣後五八ふ助られ〳〵事初瀬留が實意喜八が志誠又今度不慮の災難ふ罹り〳〵事の始め終を具ふ物語り就てハ喜八が御慈悲願ひを出をふ付ても第一ふ入費の掛ることふれば貴所の御思慮をお借申度罷出候と述べたるふ夫婦ハ大ふ驚き平兵衛が深切を厚く謝〳〵偖々夫ハ忝〳〵悴を勘當致せ〳〵も當分の懲と存ぜ〳〵ふり五八が真心ハ幇間ふどふハ珍ら〳〵又初瀬留が志操も君傾城ふハ得難き女左様の者ふりハ嫁ふ致ても苦〳〵からぞと膝の進むを知らざりける

第五回

却説も吉右衛門を平兵衛ふむこのひ何卒此上ハ總て御身ふお任せ申まをあひだ

縱令入用ハ何程かゝるも苦〜しからぎれ得べよろ〜〜御扱ひ下されたし〜就てハ喜八の急難を救ふが目下の急要あれバ是より御同道〜て出府をべ〜といへバ平兵衛も至極よき思立ありと仕度を整へ駕籠を仕立江戸へ出〜〜が吉右衛門ハ平兵衛と議り老中松平右近將監殿へハ是迄數度金子の用を達せ〜縁もなれバ内願をるに使宜ありとて公用方の役人某方へ到り一伍一什を物語り喜八が一命を助けんと歎願せ〜が己ハ罪科も極まり老中方の評議も済みたれバ今さら如何とも為る可からぎと願書を却下られけれバ平兵衛吉右衛門共ハ力を落し途方ハ暮て居たり〜が斯くてハ果じと尚金銀を惜まぬ手筋を求め内願せ〜ふより幸ハ喜八ハ大病ありとの申〜立ハ御仕置の云ひ渡〜ハ延引をれど最早助けべき手段ハく心をくるし〜め居たる折から奉公人ハ居たる喜八が女房のお梅が主家を遁れ麻布の家へ帰り来て平兵衛ハ語るを聞くハ平兵衛ハ此お梅が主人ハ火附盗賊改奥田主膳殿組與力笠原条之進ハて彼烟草屋喜八を捕へ

町奉行へ引わ〜たる人あるがこの条之進ハ生得吝嗇あるものゆゑ餘程内福あれどいまだ定まれる妻ハ〜獨寝の閨さび〜きハ依り召〜使ひの奉公人を口説こと多かり〜かバ一ケ月と動むる者ハ〜然るハお梅ハ縹致よく其上怜利き女あれバ万の事条之進が心ハ思ふやうハ取り廻〜けるハ深く戀慕〜種々といひ寄れどもお梅ハ貞節の女あれバ心ハ從ぬ夫ある身あれバといひ遁がるゝにいよ〜思ひを増〜手を變へ品をかへ口説けどもさらハ應をる景色あけれバ条之進ハ胸を焦〜或る時茶を汲み持ち来たる其手を執らへ是程までに其方を執心をれど夫ある身ハあたがひ難〜とまうをが夫無くんバ我心ハ從がふやとハかにお梅ハさ〜俯向きたるまゝ答へをあさ〜れバ条之進ハふた〜びいふやう其方ハ夫ありと思ふか夫ハ疾や亡き身あり其わけハ其方が夫喜八ハ火附盗賊を働らき町奉行所へ送られたれバ近々御仕置ハあるべ〜其妻の其方あれバ同罪ハ免がれ難〜志かれども我其方を深く

隱〜こまで恙あ〜置き〜（然）て我蔭あり斯〜恩を受けたらば我ふ從ふ
ても悪かるまじ所詮喜八が命は助からぬありトいふ傷りふて是れハ
我を靡かせん手段ありと思ひ梅を詞をな〜ため夫喜八ハ正直な
るものゆて火附盗賊あどする大膳あものあらぞ開き全〜人ちがひで
もご坐ませうと云ふを打ち消〜否々人違ひあどふてハ決〜て無〜とこれ
より喜八が火附盗賊ふ陥いり〜始末を遺もあ〜物語きり

實錄文庫　煙草屋喜八大岡政談上巻終

定價金五錢

NO.1

明治十七年十月廿一日御届
同　十八年三月　出版

編輯兼出版人　春陽堂　和田篤太郎
岐阜縣平民
京橋區南傳馬町一丁目十四番地

實錄文庫
白子屋お駒大岡政談　全二冊　定價金十錢
同　南總里見八犬傳　全二冊　定價金十錢
同　茑屋喜八大岡政談　全二冊　定價金十錢
同　赤垣源藏徳利の傳　全二冊　定價金十錢
同　佐野鹿藏英勇傳　全二冊　定價金十錢
同　荒川武勇傳　全二冊　定價金十錢
同　宮本無三四二刀傳　全二冊　定價金十錢
花茨露の面影　全四冊　一冊五十錢
春迺錦戀の妻折　全三冊　一冊三十九錢
三巴戀迺白雪　全三冊　定價三十九錢
園花匂姫垣　全二冊　定價二十六錢
八重櫻里迺夕暮　全二冊　定價二十六錢
八重戀路迺葛羅　全二冊　定價二十六錢
小三娘節用　全一冊　定價金四十錢
金五娘節用　全一冊　定價金四十錢
續編若美登里　全一冊　定價金四十錢
惣二郎江戸紫　全一冊　定價金
雪説合鏡心乃妍醜　全一冊　定價金三十錢
艶話近世奇縁月雪花戀路の踏分　全三冊　價金六十錢
海南第一勇士汗血千里駒　全三冊　定價五十四錢
異國奇談和莊兵衛　全一冊　定價金八十錢

隱しこまで恙なく置きしは我蔭なり斯く恩を受けたらべ我不從ふても悪かるまじ所詮喜八が命は助からぬなりトいふを偽りなりて是れは我を靡かせん手段なりと思ひお梅を詞をたくしため夫喜八は正直なるものなれ火附盗賊などする大膽なものならぞ開き全く人ちがひでもど坐ませうと云ふを打ち消し否々人違ひなどいへ決して無しとこれより喜八が火附盗賊に陷いりし始末を遺もなく物語きり

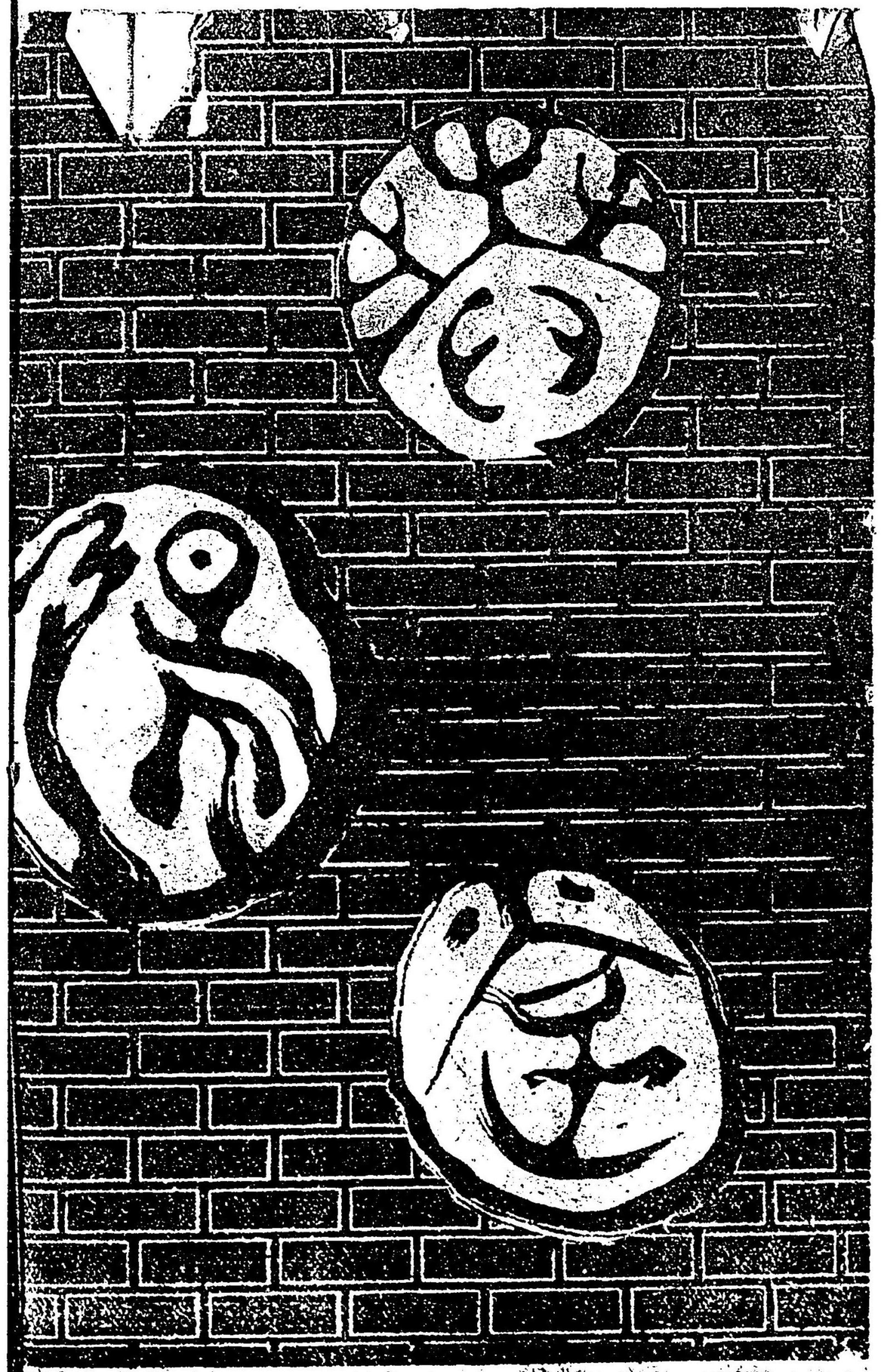
定價金五錢

NO.1

明治十七年十月廿一日御届
同十八年三月出版

編輯兼出版人　春陽堂　和田篤太郎
岐阜縣平民
京橋區南傳馬町一丁目十四番地

實錄文庫
同　白子屋お駒大岡政談　全二冊　定價金十錢
同　南總里見八犬傳　全二冊　定價金十錢
同　莨屋喜八大岡政談　全二冊　定價金十錢
同　赤垣源藏德利の傳　全二冊　定價金十錢
同　佐野鹿藏英勇傳　全二冊　定價金十錢
同　荒川武勇傳　全二冊　定價金十錢
同　宮本無三四二刀傳　全二冊　定價金十錢
花菱露の面影　全四冊　一冊五十錢
春迺錦戀の妻折　全三冊　一冊三十九錢
三巴戀迺白雪　全三冊　定價三十九錢
園花匂姫垣　全二冊　定價二十六錢
八重櫻里迺夕暮　全二冊　定價二十六錢
八重戀路迺葛羅　全二冊　定價二十六錢
ぶすき小三娘節用　全一冊　定價金四十錢
金五娘節用若美登里　全一冊　定價金四十錢
續編くま江戸紫　全一冊　定價金
惣二郎實説合錦心乃妍醜　全一冊　定價金三十錢
艶話近世月雪花戀路の踏分　全三冊　定價金六十錢
奇縁海南第一勇士汗血千里駒　全三冊　定價五十四錢
異國奇談和莊兵衛　全一冊　定價金八十錢



特42
986

205247－001－6

特42－986

煙草屋喜八大岡政談

半閑子　無聊／編

上

M18
EDV－0301